

「うっちゃ通信」は、1983 年に私が韓国留学を始めたときから発行している個人通信です。おいしいものや韓国人の情に触れたエピソードなど日常の話題を、日本の友人に知らせたくて、毎月1度発行していました。「ウッチャ」とは、「郁子」の韓国語読みと、韓国語の「笑おう」という意味をかけています。レポート用紙1枚に手書きで始めた留学中の通信は、次第にページ数・発行部数を増やし、後に晶文社から単行本『ふだん着のソウル案内』（1988 年）としてまとまりました。現在、通信は不定期発行中。自由に複写して、ご回覧いただければ幸いです。

盛夏の候、いかがお過ごしでしょうか。

わが家が仁川インチョンに引っ越して、2年余が過ぎました。引っ越しのご挨拶の後、長い間近況報告もできずにおりましたこと、心からお詫び申し上げます。

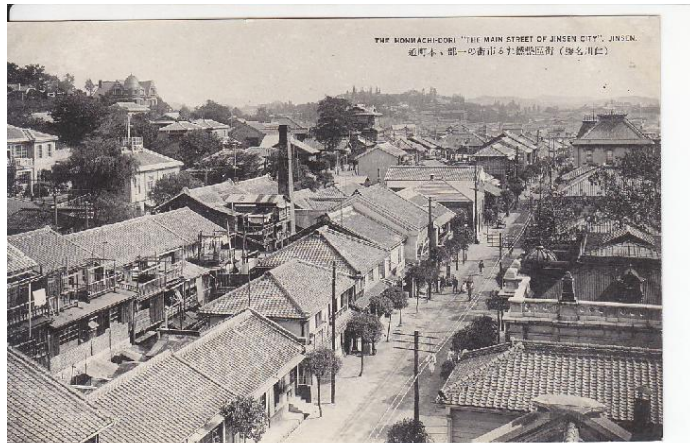
長年来の友人に、こんなことを言われました。戸田はしばらく音沙汰がないと思っていると、必ず人をびっくりさせるようなことをやってるね、と。いや、別にだれかを驚かせるためになにかをしているわけではないのだけど……と、思わず苦笑いした私です。

鎖国政策をとっていた朝鮮王朝が、釜山プサン、元山ウォンサンに次いで、三番目に開港したのが仁川です(1883 年)。漢城(今のソウル)に最も近かった仁川港には、外国人や近代の文物が一気に流入しました。そして港に面した一帯には、日本租界、清国租界、各国共同租界が置かれました。

わが家はかつての日本租界に位置する、6軒長屋の中の1軒です。引っ越しのゴタゴタがようやく落ち着いたころ、壁一枚隔てた隣家とわが家をつなげる改修工事を始めました。そして1年がかりの工事を終え、展示と交流の空間「仁川官洞ギャラリー」を開館したのです。

ギャラリー名の官洞ケンドンとは、この地域のもともとの地名です。仁川市庁に隣接し(市庁は1985年、旧日本租界から現在の場所＝新都市に移転。現在は、仁川市中区庁舎として使われている)、官公庁や官舎があることから、戦後、「官洞」と命名されたと、近所のお年寄りに聞きました。しかし最近、韓国全土で地名表記法が変わり、官洞という地名も地図から消えてしまう運命です。なくなってしまう地名を記憶するため、この名をつけました。

改修工事の際、天井裏から大正 13 年(1924 年)の京城日報が見つかり、この長屋が築 90 年になることを確認しました。90 年もの歳月を経て、なお堅固に立っているのを見ると、生来の職人気質の大工が作り上げたに違いありません。かつて日本人が建てた家に、今、日本人の私が住むとは、なんと不思議な縁でしょうか。



日帝時代の仁川府市街の絵葉書を見ると、木造瓦葺の日本式家屋がずらりと並んでいる。手前から奥へ延びる通りは「本町」と呼ばれていた。本町と並行した裏通り、この写真の通りの左側に、「仲町」があった(戦後は官洞と呼ばれた)。中央の高い煙突(銭湯)と、左上の小高い丸屋根の邸宅の間に、わが家のある6軒長屋が立っている。

改修工事は、漢陽ハニャン大学建築学部の富井正憲教授にお願いしました。思えば 5 年前に富井先生に初めて会ったのも、ここ仁川でした。富井先生は当時、1930 年代の京城の街を再現する展示を準備中でした。また富井先生は私たちの仁川での家探しにも、大いに力となってくださいました。

韓国の木造建築専門の「所要建設」(現コピーズ建築施工共同組合)が施行を担当し、韓屋専門の大工さんが中心となって作業を進めました。富井先生の学生たちも積極的に工事に参加し、柳と私も、資材選びや食事のお世話、ペンキ塗りや掃除などの作業に加わりました。

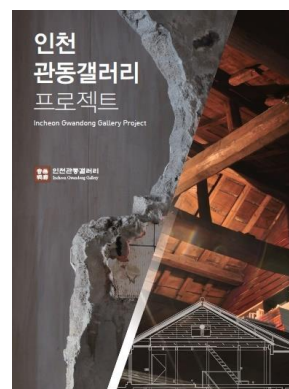
ギャラリーを持つことは、写真家であるつれあい柳銀珪リュ・ウンギョの長年の夢でもありました。私は歴史の現場に住みながら、さらに説得力を持って近代史の話ができるような気がします。

日帝時代という歴史へのこだわりが、私を韓国へと導きました。そして今、ここが自分の終の棲家になるだろうと、満たされた思いです。この家に住むことは、柳と私にとって運命だったのかもしれないと思うのです。

家とはたんに寝起き場所ではなく、生き方にまで影響を与えるものだとなりました。これまでの新都市のマンション暮らしでは、わからなかったことです。

改修工事にかかわった大学生の金君は、今春から休学して、大工見習いになりました。1年前には戸惑った表情で富井先生にしごかれていた金君が、今では自分の大工道具も少しずつそろえて、家作りの現場で働いています。この家は金君の人生にまで、大きな影響を与えたわけですから。そんな力を生み出した富井先生に、敬服するばかりです。

仁川官洞ギャラリーのテーマは、「記憶と再生」です。開館にあたり、この地域の歴史や日本式住宅について、そして改修工事の経過などをまとめた冊子『仁川官洞ギャラリープロジェクト』を発行しました。
A4 版 40 頁 300 円 (韓国語と日本語を併記)



展示案内

- 7/4 ~8/2 抗日女性独立運動家詩書展 (終了しました)
8/14~8/30 資料で見る日帝侵略史展
9/11~10/11 仁川日式住宅再生プロジェクト vol.2
9/12 午後、漢陽大学の学生による研究発表を行います。
(9/25~27 秋夕の連休は、休館の予定です)

※ギャラリーは金土日の 10 時~18 時開館。

ゲストハウスも運営しております。詳しくは添付ファイルをご覧ください。

* — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

韓国に住み始めて30年余りになる私は、昨年、初めて投票に出かけました。韓国では永住権を取って丸 3 年たつと、地方選挙へ投票することができます。国政ではなく、市長や区長、市議会議員、区議会議員を選ぶ、暮らしに直結した選挙です。

投票日の何日も前から、私は新聞やテレビニュースを丹念に見ました。家に配達された候補者一人一人の印刷物も、熟読しました。日頃から政治家たちに関心を持っていたわけではないのですが、自分なりにあれこれ考えながら、候補者の公約を読み比べました。

投票は成人にとって、当然の権利だと思う人も多いでしょう。しかし同じ町に住みながら、この権利を持たない隣人もいます。市議会議員なんて、だれがなっても同じだと言う人もいます。しかし自分の選択は、町の暮らしに意見を反映させる道ともなるのです。

これまで私は長く韓国に住みながら、「どうせ自分は外人だから」と、疎外された気持ちを持っていました。しかしようやく、自分の存在が認められたような喜びを感じます。そして、私もこの町のためになることをやりたいという、積極的な気持ちを持つようになりました。

投票所がチャイナタウンにある「韓中文化院」だということも、嬉しいこと。この町に住む華僑も、投票に出かけます。投票日、私は朝6時に起きて、早く行こうとつれあいをせかしました。韓国人のつれあいは寝ぼけ眼で、「なんでこんな朝っぱらから、投票なんか……」とブツブツ。だいたいつれあいは、家に届いた選挙広報の入った封筒の封も切っていません。「私はあなたよりずっと、この町の将来について、真剣に考えているのよ!」と、大見得を切った私です。

「多文化」が急速に進む韓国社会が、永住外国人を制度的に社会の一員として受け入れ始めたのは、国際結婚の急増という背景もあります。

時代が変わり、社会が変わろうとも、連綿と続いた制度を変えようとはしない日本の保守性について（それでいて憲法は変えようというのは、なぜ？）、私は考えこんでしまいます。日本が外国籍定住者の参政権を拒む理由はどこにあるのか。私は在日コリアンの友人たちの顔を一人一人思い浮かべながら、住みやすい社会とはどういうものかと、考えていました。

自分もこの町の住民であるという意識は、仁川官洞ギャラリーの展示にも反映します。この町に住む唯一の日本人である私に、できることはなんだろうかと、考えています。ギャラリーのこけら落としとして行った、漢陽大学の学生による「仁川日式住宅再生プロジェクト」や、春の中区庁のお祭りに合わせた「開港場日本租界地の生活展」など、地域の人にぜひ見てもらいたい展示でした。

展示を企画する立場になって改めて痛感したのは、私は日本人だけれど、日本の文化を紹介するための十分な情報を持ち合わせていない、という現実です。衣食住という基本的な文化についても、自分の知識はいかに狭くて浅いか、思い知らされています。日本の着物についてよりも、韓国のチマチョゴリについての方が、語る言葉が多いくらいです。

ふと、わが家が屋根を直しているときには、他人の家の屋根や雨どいばかりが目につき、道路では建築資材を乗せたトラックばかりが目がいったことを、思い出しました。私たちの目はたくさんものを見ているようで、実は自分に必要な情報しか見ていないのです。これまで私の目には、日本の伝統文化は「見えども視えず」だったことを、とても恥ずかしく思います。

* — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

今年の7月、つれあいの柳銀珪が中国貴州省で開催された写真展に招待されて、私も一緒に出かけました。 <http://www.photoriginal.cn/show-31-36-1.html>

貴州省政府と中国新聞社貴州分社、中国文聯撮影芸術中心が主催した催し。毎年、貴州省の各地を回って開催されるそうで、第8回目の今年は安順市でした。実は私、26年前にここへ来たことがあるのだけど、それを言うことが憚られるほど、どこもかしこもすっかり変わっていました。

安順市郊外の、その名も「旧州」という古い村の小学校で写真展の開幕式がありました。ここは600年の歴史を誇る村。古い家々の壁にまで、写真作品が貼り出されています。中国各地、ウクライナ、オーストラリアなどから来たカメラマンは、かつて地主のお屋敷だったはずの由緒ある木造旅館に泊まり、朝早くから歩き回って、村の人々の暮らしを垣間見ました。

安順市内でも、写真展やセミナーなどの行事が行われ、また郊外にある黄果樹の滝や少数民族の村、奇岩絶壁の観光地など、一週間もかけて案内してもらいました。大型バスを連ね、ホテルや食事まで丸抱えで面倒見するという太っ腹な接待旅行です。観光開発に力を入れる省政府は、写真家たちに写真を撮らせて、それを観光宣伝に使ってもらおうと、このような行事を毎年行っているのです。

中国経済の勢いには、圧倒される思いです。中国新聞社の若い社員たちの働きぶりにも、大いに感心しました。それぞれが外国語を駆使し、どんなに疲れていても笑顔を絶やさず、きびきびと動く20代の若者たち。忍耐強く有能なエリートたちが、中国の未来を拓いてゆくのだらうと、まぶしく思いました。

旧州の村では、柳の後をついて離れない少年たちがいました。柳は彼らにとって、初めて見る外国人の写真家なのでしょう。いつまでも柳の写真展の会場で戯れており、母親の呼び声にも答えません。もしかしら20年後、この子たちの中から有名な写真家が生まれているかもしれない……。そんな幸せな想像をたくさんしました。



今回の行事の中で、北京の故宮にあった宝物が台湾に運ばれた逸話を聞くことができました。台湾在住の写真家、庄靈氏(77才)の「夢回安順」という講演です。

庄靈氏の父上である庄巖氏(1899年生まれ)は、北京大学哲学科を卒業し、「国立北平故宮博物院」に勤め、後に副院長となります。満州事変後の1933年、日本軍が山海関を越えて北京に迫ると、故宮の宝物の移転が検討されました。戦火がおさまったら元の場所に戻すことを約束して、ひとまず上海へ移すことが決まりました。このときから庄巖氏は、故宮の宝物と運命を一つにするのです。

宝物は1万3千余りの箱に詰められて、その後4年間、上海で保管されます。1935年、ロンドンで行われた「中国芸術展覧会」のため、厳選した宝物が大型の鉄箱80個に詰められ、上海からイギリスの軍艦でロンドンに運ばれました。ロンドン展に随行した庄巖氏は、宝物を詰めた鉄箱と共に、1936年上海に戻ります。宝物はその年末、戦火を逃れて貨車で南京に移動し、市の中心部にある朝天宮に保管されました。

1937年に日中戦争が勃発すると、厳選された80箱の宝物が揚子江を船で渡り漢口へ。そして貨物列車で長沙へ移ります。しかし日本軍の長沙爆撃を受け、今度はトラックで桂林へ。そして貴陽へ移動。庄巖氏の家族も宝物と共に長旅を続け、三男の庄靈氏は貴州省の省都、貴陽で生まれました。

1939年初、宝物は貴陽郊外の安順の洞窟へ移されました。幼い庄靈氏は、兵士たちが守る洞窟の鉄箱の周りで、兄たちと遊びました。天気の良いときには、宝物を外に出して虫干ししていたそうです。

1944年、鉄箱は庄巖氏家族らとともに四川省に移動。47年には南京へ。そして48年末、国民党の軍艦で台湾に渡りました。宝物の一時避難先として、大英博物館とモスクワ博物館が名乗りをあげていたそうです。故宮の宝物のすばらしさは、当時すでに、世界の耳目を集めていたのです。

庄巖氏は1980年、台北で亡くなりました。死の床にあった庄巖氏は、今わの際に「北平ペイピン」と言ったそうです。北平は北京の旧名。故宮の宝物を北京に戻すことが、庄巖氏に課された使命でした。庄巖氏自身も、生まれ育った北京の土をどれほど踏みたかったことでしょう。しかし台湾人が中国本土を旅行できるようになったのは、1997年からでした。

1999年、庄巖氏の息子である写真家の庄靈氏は、初めて中国本土を訪問し、幼いころの記憶をたどって安順にやって来ました。しかし文化大革命の時代に、当時の記録はほとんど失われていました。庄靈氏はその後幾度も安順を訪問し、ついに5年前、宝物が保管されていた洞窟を探し当てたのです。

私たち家族が南京に住んでいた10年前、何度も南京博物院に出かけて、すばらしい宝物の数々に感動したことを思い出します。南京に建国した明は、その初期に北京へ遷都したのに、なぜ南京には明代、清代の宝物がこんなにたくさんあるのだろうと、私はずっと不思議に思っていました。

実はこの宝物は、北京の故宮から日本軍の攻撃を逃れて運ばれ、南京に残されて、南京大虐殺や国民党と共産党の内戦など、戦火の中を守り続けられてきたものだったのかと、胸を突かれる思いです。

手の届くほど近い過去の話。しかし息子の庄靈氏の努力がなければ、深い歴史の海に沈んだままになったはずの話です。台湾の故宮博物館で聞いた「北京にあった宝物を、蒋介石が台湾に運んだ」という説明を、私は鵜呑みにしてきました。しかしその一言の裏には、数多くの人の命がけの戦いがあったことを知りました。いつかまた南京博物院を訪ねて、じっくりと展示を見たいと思います。人生をかけて宝物を守った人々のことを偲びながら……。

* — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

今年は節目の年です。日本の敗戦から70年、日韓国交正常化から50年、そしてベトナム戦争終結から40年。韓国では様々な行事が、「光復70年」を迎える8月に予定されています。

8月5日から11日まで、ソウルの朝鮮日報美術館では、桑原史成氏の「激動韓国50年」という写真展が開かれます。<http://photobada.com/220435592747> 韓国現代史の現場を見つめた人の記録を、私もぜひ見に行きたいと思います。

仁川官洞ギャラリーは、韓国のいくつかのテレビの「光復70年特集」で取り上げられる予定で、すでに収録を終えました。取材を受けたときの展示は、李潤玉詩人・文寛孝書家による「抗日女性独立運動家詩書展」でした。8月14日からは、仁川近代博物館の崔雄奎館長の秘蔵資料を公開する「資料で見る日帝侵略史展」を開催します。歴史の真実を見せるという役割を担った責任を、ひしひしと感じています。

互いに不信感をつのらせる昨今の日韓関係を、「最悪」と評す人は多いのですが、30年余り韓国と関

わってきた私から見たら、30 年前より今の方が、日韓関係はずっと良くなったと実感しています。最近では「歴史認識」の違いが、マスコミでよく取り上げられます。歴史認識とは、史実をどうとらえるかという観点のこと。立場の違う双方の見方が異なるのは、むしろ当然のことでしょう。

実は、「強制連行」や「従軍慰安婦」などの単語は、以前は一般にはほとんど知られていなかったものです。ところが最近では、歴史にあまり関心のない人まで、その単語を認識するようになりました。これぞまさに、日韓関係における大躍進！ 否応なしに歴史問題を突きつけられる宿命を、ようやく多くの日本人と共有できるようになったことを、私は幸いとすら思うのです。

双方のヒステリックな論争も、心を落ち着けて眺めれば、さして悪いことではありません。様々な意見が出てきてこそ、歴史の検証や研究もさらに進むのだから。

過ぎた歴史は、その場にとどまっているわけではありません。歴史はときに政治に利用され、歪曲されたり暴かれたり、また消されたりもします。どの時代のどの出来事が世間の関心を集めるかは、社会情勢によっても変化します。

30 年前、私が韓国の大学で韓国近代史を学んだとき、旧満洲の抗日独立運動の多くは、「初めて聞く話」として、学生たちの興味をかき立てました。今ではその時代の歴史を、高校生が大学受験のために暗記しています。

韓国の教科書で抗日独立運動の比重が増えたのは、政治的な意図や韓国民の気持ちの反映でもあります。韓国ではその間、日本に追いつき追い越せという気運が、社会にみなぎっていたからです。

被害を大きくとらえるほど悲壮感が高まり、人々の関心が集まるのは、どの国のどの時代にも共通したことです。韓国人の言う「慰安婦 20 万人」も、中国の「南京大虐殺 30 万人」も、日本がこれまで史実を明らかにしていれば、出なかった数字のはず。歴史から目を背け、侵略の事実と向き合わずにきたツケは、若い世代に引き継がれていくのです。

一人の大人として、私もそれを申し訳なく思います。しかしこれからは、戦争の記憶を持たない者同士、冷静に史実を見直すことができるかもしれない。そのことに希望を持ちたく思います。

先日、興味深い講演を聞きました。歴史学者でありジャーナリスト、旧ソ連出身で、後に韓国に帰化した朴露子バクノジャ氏(42 才・男性)の、「植民地朝鮮人の見た中国、そして華僑」です。

朝鮮半島が植民地の時代、安価な労働力として海を渡って来た中国人。彼らを見る朝鮮人の目は、否定的だった。それは日本人が植民地朝鮮人を見る目とも、共通していた。当時の日本人が中国人を見下げていたのと同様に、朝鮮人は中国人を蔑視した。朝鮮の新聞報道もそれをあおり、文学の中でもそんなイメージが固定化されていった。あるいは、朝鮮人は日本人に対する憤りを、中国人にぶつけることもあった。そんな「他者に対する目」は、今の韓国人が朝鮮族を見る視線にも共通しているのではないかと。マスコミが誘導して、「否定的な他者」を作っていく構造は、昔も今も変わりが無い。「私たちはもっと、過去から学ぶべきことがあるのではないか」という朴露子氏の問いかけに、大いに共感しました。

私たちは、今をよりよく生きるために歴史を学び、よりよい未来を作るために歴史を学ぶのです。近代の産業革命遺産をめぐる話、日本のヘイトスピーチ、韓国文学に描かれる日本人の姿、今も日帝の残滓を消そうと奮闘する韓国人のことなど、歴史がらみの話を始めるときりがなく、いつまでたってもこの通信は書き終わりません。私の話したいことは山ほどあるのだけれど、いつかお目にかかって、ともに語る機会があればと思います。

節目の年に、隣国からも注目を集めている「戦後 70 年談話」。その内容によっては、日本の外で暮らす日本人が、困る状況に置かれることもあるでしょう。最近の中国では、「日本人か」と問われると韓国人のふりをする日本人もいるほど。私も中国で、日本人と言ったとたんに顔を背けられたり、逆に見知らぬ人から慰められたりと、笑えない出来事を幾度も経験しています。

日本政府の言う「在外国民の保護」など方便にすぎず、国家にとって個人は、有事の際に利用する捨駒に過ぎないことを実感しています(もちろんそれは、日本だけに限りません)。

韓国政府は「光復 70 年」の今年、8 月 14 日の土曜日を臨時休日にと発表しました。毎年めぐってくるこの日ですが、「今年こそは」の特別感。もうすぐ、8 月 15 日がやってきます。

* — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

大騒ぎだったマーズウィルスの拡散が収まり、ようやくほっとした韓国ですが、愉快的話題よりも暗い

話の方が多いのが現状です。とくに長引く不況の影響で、若者が希望の持てない社会になっていくのが心配です。大学を卒業したら就職に不利になるからと、留年して語学を学んだり、資格試験の準備をしている学生たちが、私の周囲にもたくさんいます。

最近のニュースでは、青年失業率が 10.2%で史上最高、留年中の大学生は 45 万人との報道が。しかもこの傾向は、今後もしばらく続くであろうという見通し。1997 年の「IMF 危機」よりも深刻な状況だと言われています。

韓国男子の義務である兵役は、入隊希望者が集中して、希望する部署への配属は 1 年以上も待たなければならないと聞きます。愛国心あふれる若者が増加しているわけではありません。兵役の間は休学扱いとなって学費がかからないため、経済的な事情で兵役を志願する者が増えているのです。

幼いときから教育投資を続けてきた親たちは、大学を出た子の面倒まで見なければならない現実、どう立ち向かっていくのか……。親の方とて、リストラや倒産など、暗い話ばかりだというのに……。

そんな社会だからストレスも多く、昔ながらの人情が希薄になっていることを感じます。かつては善い意味での韓国的な「おせっかい」が、今は「嫌がらせ」に転換しているような気がします。おだやかだった人間関係がギスギスし、静かだった町が騒がしくなる。その原因はいつも、金、金、金……。『低迷する経済状況を打破するには、南北統一しかない』という統一待望論を、私は寒々しい思いで眺めるのです。

少し前の話になります。暑さの最中に、真冬の冷たい幸せを！

昨年クリスマスに、婚家の家族一堂で、舅姑の結婚 60 周年を祝いました。舅は話しました。

60 年前のクリスマス、妻となる人の実家で婚礼を儀をすませた夜、田舎道を、賛美歌を歌いながら歩く子どもたちの姿があった。その翌朝、窓を開けると、辺り一面美しい銀世界だった、と。韓国でも中国でも、真っ白な雪は吉兆です。そのおかげで家族一堂、健康で幸せに暮らせているんだね、と皆で笑い合いました。

舅の語った江原道の僻村の光景が、私の心に深く刻まれました。

植民地から解放されて間もなく起こった朝鮮戦争で、国中が混乱した時代です。舅姑も、怖いことをたくさん見聞きした世代です。だれもが体や心に受けた傷がまだ癒えない、1954 年の寒い夜。村の小さな教会では、クリスマスイブの礼拝が行われて、子どもたちが大きな声で賛美歌を歌っていた……。戦乱の世を生きのびた庶民の、ささやかな幸せが、かけがえなく尊いものに思えてきます。

どんな時代にも人の営みは続き、だれもが幸せを願いながら生きています。昔も今も、なんら変わりなく。生まれてくる時代を選べる者はどこにもおらず、ときには運命に抗い、あるいは受け入れて、生きてゆくのだと思ったとき、ふと私の耳の奥に、民謡のしらべが響いてくるような気がしました。

世俗の雑事にがんじがらめになったとき、ほんのささやかな幸せが、大きな支えとなります。だから人はつらいことや悲しいことがあったときにも、歌を歌うのでしょう。韓国に伝わる伝統民謡は、原初の人々の営みを、思い起こさせてくれる力を持っています。

零細の図書出版土香トヒャンは、文字通り細々と歩みを進めております。本の売れない時代だと言われようとも、私が倒れない限りは続けてゆくぞと、心意気だけは高く持ちながら。

胸をはって、お知らせを一つ。今年 5 月、『ソリの道をさがして』シリーズの第一弾「南道民謡」が、三刷りとなりました。初版から 7 年ぶりの快挙です。

伽倻琴カヤグムの独奏を五線譜にした楽譜集には、古人の喜びや粋や悲しみが詰まっています。私を韓国民謡の道に誘ってくださった池成子チソンジャ先生初め、本作りをともに歩んだ方々に、心からの感謝を捧げたいと思います。

久しぶりの通信、長くなりました。仁川官洞ギャラリーのご案内も、ファイルを添付してお送りいたします。家づくりの次は町づくり……と、私はまた、いろんなことを企んでいます。しかし、なかなかうまくいかないこともあり、落ち込んでしまうことも。そんなとき、家の境界を楽々と超えてゆく野良猫の姿を見ると、思わず笑いがこみ上げます。

今日もタン屋根の上を、ドタドタと歩く猫の足音が、向こうの家からやって来て、わが家を通り過ぎ、隣の家へ移動していきました。私もここで、人に媚びず、自由に楽々と、やりたいことをやりたいようにやっていくぞと、ぜいたくなことを考えて日々を過ごしています。

みなさま、ぜひ歴史の町仁川に、足をお運びください。笑顔でお待ちしております。

光復 70 年を目前にした盛夏の日に 吳子